

# 理事対談

## トップ同士ではなく現場レベルでの連携を

今回の理事対談は、仙台で家庭教師派遣や塾を営んでいる株式会社セレクトィー代表取締役島山明さんと当センターの大滝精一代表理事に、企業のCSR活動・NPOとの協働について語っていただきました。

### ■発達障害のお子さんの受け入れ

大滝:今日は、企業のCSR活動について話が及ぶと思いますが、まず島山さんの会社の事業内容と、どんな想いをもって活動をしているか教えてください。

島山:株式会社セレクトィーは、1996年に設立しました。事業としては、「家庭教師のアップル」「個別教室のアップル」「人材派遣のアップル」を行っています。私は、もともと小学校教師でした。その時、集団の授業についていけない子が居ましたが、集団授業ではどうすることもできず、そんな子どもを1対1でフォローしたいと思い会社を設立しました。

経営面では勉強不足だったので、最初は苦労しました。設立当初は、自宅への講師派遣からスタートし、その後学習塾の教室を開くようになりました。教室でも、1対1の個別指導という形をとっています。また、学校への講師派遣も行なっています。

大滝:「家庭教師のアップル」では、発達障害のお子さんへの授業を行っていますよね。きっかけは何だったんですか？

島山:学習支援を行う中で、同じように教えているのに他の子どもより勉強が身に付かない子や、数学は出来るのに英語は全く身に付かない子がいることに気付いたんです。その時は、発達障害の事は知りませんでした。その後、そういった症状は発達障害が

原因の可能性のある事を知り、講師の中からも「発達障害について勉強したい」という意見が出てくるようになりました。講師の中に、(特活)自閉症ピアリンクセンター「ここねっと」(以下、ここねっと)の知り合いの者がいたので、まず「話を聞いてみよう」ということになり、勉強会を開くようになりました。勉強会を行うようになり、講師からも「なぜ子どもたちが分からないのか理解できるようになってきた」という声が聞こえてきました。そこで発達障害についての基礎コース、マスターコースを設け、希望した講師が受けられるようにしています。保護者の中から「学校の先生よりも子どものことを分かってくれる」と言われることもあります。収益には結びつかないけれど、今後も持続して取り組んでいきたいと考えています。今は講師向けに発達障害の勉強会を開いていますが、保護者向けの発達障害についての勉強会も行っていけたらいいと考えています。

大滝:発達障害の生徒に対応する講師は、どうやって決めているんですか？

島山:講師は、基礎コース、マスターコースを受講することになっていて、コースを終了後、「発達障害の子にも教えてみないか?」とこちらから打診をしています。難しいのですが、中途半端な知識で「発達障害の事を理解している」と勘違いし、実際生徒さんと対面した途端へこたれてしまう人もいます。ですので、話し合いをして、マスターコースを受講終了してなくても、私達がフィットしていると思う講師をご紹介します事もあります。そのほうが相性が合い、授業もうまくいくことが多くありました。今までは、ここねっとにお願いして講座を開催してきましたが、将来的には自分たちでも講座を開催できるようになりたいと考えています。それにより、障害のあるなしに関わらず、「苦手科目を伸ばしたい」という多くのアップル会員への支援技術と、事務局機能の向上にもつながります。

### ■CSRではなく企業理念の延長として

大滝:お話を聞いていて、会社の理念として「1対1の個別指導」という考え方の延長線上に、今の取り組みがあるなと感じました。しかし、発達障害の子どもに対して、個別に勉強を教えていくのは手間がかかるとは思います。講師の皆さんはどういう反応ですか？

島山:講師には負担になっていると感じることもあります。発達障害のお子さんを抱えたご両親も心的負担を抱えていることも多く、そのため保護者の方からクレームを言われることもあります。家庭教師なので、自宅に行く事もあり講師はそういった場面に出くわす事もあるようです。

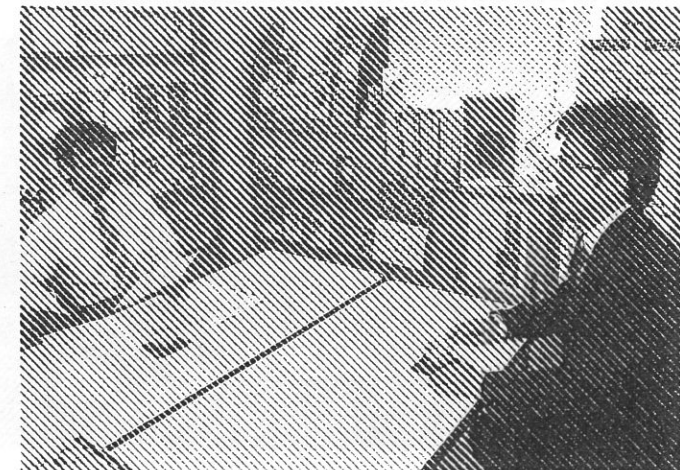
大滝:会社として、発達障害のある子どもさんに教える取り組みは社会貢献の一環だと考えていますか？

島山:それはあまり考えていません。発達障害のあるお子さんだ

けに教えている訳ではないですし、発達障害のあるお子さんに教えるためのいろいろな工夫は、他の子どもさんに教える時にも同様に効果的な場合があります。スタッフの中では「特別支援教育士」の資格所得を進めています。社会貢献というよりは、CRSの一環で、スタッフの勉強だと考えて続けて行こうと思っています。

大滝:「ここねっと」と連携しているというお話が出てきましたが、具体的にはどんな取り組みをしていますか？

島山:発達障害は個人によって、症状の内容も程度も違ってきます。私たちは医師ではないので、症状の全てを正確に理解できる訳ではありません。なので、私たちは発達障害のお子さんの学習支援



に特化していこうと考えています。それ以外の部分は、医師や、「ここねっと」と連携していこうと思っています。

大滝:極端な話になってしまいますが、ノーベル賞を受賞した人でも発達障害がある人が居ますよね。発達障害がある子どもの、良い面を上手に引き出す努力が必要ですね。

島山:一人ひとりの良さを上手に引き出せたら、すごい才能を発揮できると考えています。むしろ配慮していかなければならないことは、2次障害。周りの理解が得られずに不登校や反社会的行為にいたってしまうケースもあるようです。発達障害への理解は、広く伝わってほしいと思っています。発達障害は、程度の違いはありますが、約6%の人がその可能性があるかと推計されています。

### ■トップ対トップではなく現場でのやり取りを

大滝:今後の展望を教えてください。

島山:自社の研修制度を整えてさらに教師の質と事務局機能を高めていきたいです。また、将来的に公益団体を作りたいと考えています。そこをプラットフォームにしてNPO、行政、医療機関の方々と連携し、いろいろな方から子どもたちへの支援が得られるような場所を作っていけたらいいと考えています。

紅邑:NPOとの関わりで何か意識をしたことはありますか？

島山:NPOの方は熱意が素晴らしいです。私たち企業にそういっ

た事を教えて欲しいし、活動を継続的に続けて頂きたいと思っています。逆に質問ですが、その想いが10年20年経ってくる中で、団体として続かない事はあるんですか？

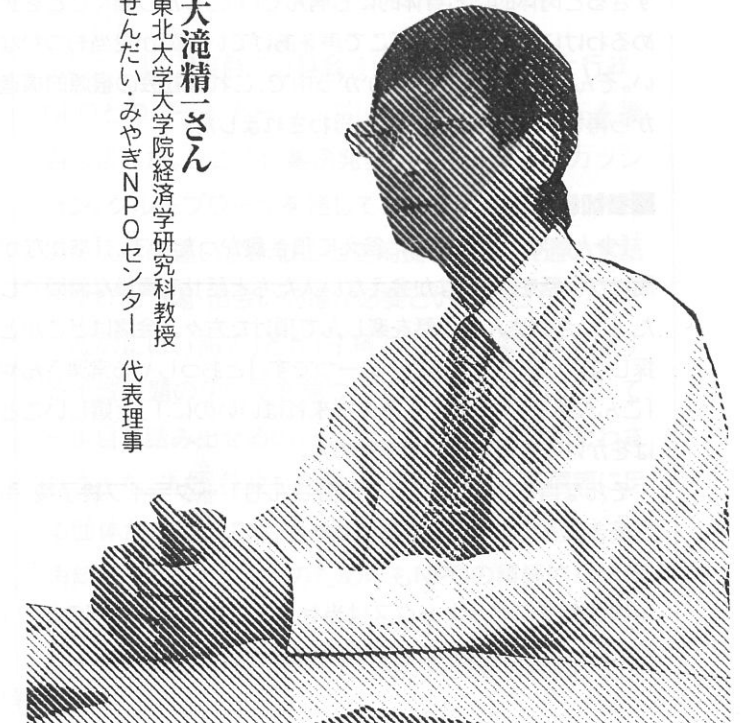
紅邑:NPOはミッション達成により解散したり、考え方の違いによって会が別れる事もあります。そういった所は、企業と同じですね。

大滝:社会で起こっている問題の先端を捉え続け、追いかけていくのは大変。ルーティーン作業に捕われてしまったり、問題を見つけていく力がないこともある。全てのNPOが、展開力や運営力があるわけではないので難しいですね。

島山:一緒に活動している「ここねっと」と連携をしていて、当然生じるお互いの良さや違いを認識し、良い距離感を保ちつつ、効果をもたらそうとするには、お互いに努力が必要です。しかし、すぐにはできないことだと思えました。それがうまくできれば、たとえ時間が経過しメンバーやトップが変わっても同じ話ができて、良い関係を継続できると感じました。

大滝:この問題は、NPOと企業がコラボレートする時の問題点だと思います。最初は、トップ同士が話し合い事業を理解しあって始める。しかし、時間が経てば時代も問題も変わる。本当は、現場同士がやり取りして活動が進むのが理想。そのためには、現場の人に「発達障害の子どもをなぜ預かるのか」、その理念が伝わっていかなくてはならないですね。今日は、どうもありがとうございました。「記録・編集・内川奈津子」

大滝精一さん  
東北大学大学院経済学研究科教授  
せんだいみやぎNPOセンター  
代表理事



ゲスト  
島山明さん  
株式会社セレクトィー  
代表取締役  
せんだいみやぎNPOセンター  
評議員

